
草野球チームを作ろう！！

蜻蛉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

草野球チームを作りつーー！

【Zコード】

Z7117A

【作者名】

蜻蛉

【あらすじ】

俺の名前は春日裕樹。今年で社会人2年目になりました。いたつて普通に1年間社会人やつてきたけど、まあ「こんな人生やつてられつかー！」てなぐあいになつた訳です。そこでーー勝手に仲の良かつた連中を呼んで、草野球チームを作ることにしましたーー目指すは勿論日本ーー！願わくばそのまま、プロ行き！ーーなんかを狙っています。幸い今日から連休！早速今日から練習開始です！さ、連絡つくかなあ？

プロローグ

俺の名前は春日 裕樹。

今年で社会人2年目になりました。

いたつて普通に1年間社会人やつてきたけど、まあ「こんな人生やつてられつか！！」

てなぐあいになつた訳です。

そこで！！勝手に仲の良かつた連中を呼んで、草野球チームを作ることにしました！！

且指すは勿論日本ーーー願わくばそのまま、プロ行きーーーなんかを狙っています。

幸い今日から連休！早速今日から練習開始です！

さ、連絡つくかなあ？

「うーん・・・最初は誰にしようかなあ？」

携帯を手に記念すべき最初の選手を悩んでいる俺。

「やつぱりアイツかな。」

そう言った俺は履歴からそいつの番号を探して電話をかけた。
プルル～プルル～プルガチャ

『何？』

「おう！元気かカズ！！」

俺が最初に電話したのは、小・中・高と仲の良かつた奴。あ、名前
は安土 和伸。愛称：カズ。

小・中・高と一緒に学校に通っていたが、野球部に入っていた事が
無い。

今は、仕事をしながらオッサン達がやっている草野球に良く混ぜて
もらっていたらしい。

野球については、中学校後半に自身が野球に目覚めたらしく、よく
家に来て一緒に野球をしていた。

『ああ、元気だ！つで、何用？』

『え～と、お前毎週土・日暇だろ？』

『ああ、もうする事なくて困ってたとこだよ。遊ぶ？』

「俺、草野球チーム作るつもりなんだ・・・」

『いいだろ？！――』

「うひつなー即答ーー？？」

俺は、根気良く説得するつもりだったのだが、和伸のあまりに速い返答に驚いてしまった。

『え？俺野球するの好きだからー』

あ、そうですか

「じゃあ、お前には一番当たってるからな。野球経験がないお前だから本気で練習したら何処まで成長するかわからないからな！」

『まかしとけーーじゃ、これからワソニーニングしてくるわ。じやな

「おうー頑張れよ。じやな

よし！一人目獲得 次は・・・

フルル～フルル～ガチャ

『もしも～』

「もしも～し俺草野球チーム作るうつと思つてんだけど・・・

「

と、根気良く俺は18人ぐらいに電話＆交渉した。
そのかい合つて、俺は何とか16人集める事が出来た。（2人断られちゃつたけどね）

そして今日は始めての練習する日。

ここは、俺の故郷の町清流町の市民球場。
今日は全員が出てきてくれた。

「え～っと、今日は皆集まつてくれて有難う。で、今日はいろいろな事を決めないといけないから、皆の意見を聞かせてくれ。」

俺は一度見まわしてから

「最初に、チーム名を決めたいと思つんだが、誰かいい名前はないか？」

しーん・・・・・・
うーん、誰も話そとしないな。
じゃあ、違う話題にするか。

「えっとおーじゃあ、この話は後ににして、次いくけど・・・・いち
お、監督兼キャプテンを俺がするけどいいか？」

『いいよ』

「じゃあ、次は副キャプテンだけど・・・俺は内村君にやつてもらおうと思つてるけどどうかな?」

『いいんじゃね!』

「ええ~、まあいいけど」

この男の名前は、内田 春樹。愛称・つっちゃん。大学まで野球をやつていて、高校時代はこの地区の強豪校の一一番打者をやつていた。2年生の時からレギュラーで試合に出ていて、甲子園も一回経験している。

野球のスタイルはイチローみたいな感じで、ポジションは主に外野全般。外野なら何処でもこなしている。堅守で、俊足!バッティングも野手の間を狙つて打てるようなバットコントロールを持つている。

俺とは小さい頃からの友達で、中学までは一緒に野球をやつていた。俺よりも人望はあると思つ。

「じゃあ、うつちゃんと決まり 次に、俺もうつちゃんもこれない時のまあと、副々キャプテンになる人なんだけど、沖田にやつてもらていいかな?」

『俺は、いいですよ』

こいつは、沖田 翔。愛称・特になし。野球は高校までで、いちお大学には行つてたけど、大学ではテニスをしていた。

沖田は、力は無いがある程度なんでも出来る天才肌で、大学から始めたテニスも、3・4年生の時に全国大会にまでいつている。

野球のスタイルは何でもやつてくれる奴で、ポジションは主にサード。でも、やれと言わいたら全部のポジションをやれるはずだ。バッティングはアベレージ型だが、甘い球は簡単にスタンンドに運べる。俺とは小学校の時からの友達で、何故か俺とはウマが合っていた。高校でも俺は沖田と一緒にやっていた。

「じゃあ、沖田で決まりー最後に会計つづーか、まあマネージャーなんだけど、やっぱり・・・女の子の方がよい?」

『そんなの当たり前じゃねえかあー!!』、『男がマネージャーするんなら辞めてやるー!!』

など、何故か俺の周りにはだいたい25にもなって、彼女または結婚している奴は片手でも十分に余裕で数えられるぐらいしかいない。

「ちょ、落ち着けって。まだマネージャーは居ないけど、一ヶ月待つてくれれば必ず見つかるからーそれに、皆の方からもスカウトしてきてくれよー!」

『任せとけー!』

「そして、一ヶ月は基礎練に、紅白戦をやる。それが終わったら練習試合を週一で組むから、全部勝つつもりでー負けたらそれ以降の練習が厳しくなるから、心してくれー!」

俺はおおまかな計画を話した。

「あ、それと草野球のリーグは2月末から始まるから、今から約・
・10ヶ月後だ。勿論優勝するぞ!」

じゃあこれが練習方針だけど、今度からは練習場に到着したら2

周ランニングをしてくれ。その後、時間になつたらキャッチボーラ・ハーフバッティング・休憩を挟んでフリーバッティングをして、野手は守備練、投手はピッチング練習をして後自由…！練習終了前には必ずダウンをしてから終わってくれ。あと、交通手段が無い人は、俺が送つてやるから。ここままでで、質問のある？

「はいはあーい！」

そう言つて、手を上げて元気よく返事したのは、

岡島一樹。愛称：特になし。野球は中学で辞めている。高校ではテニスをしていて、たいした成績は挙げていない。大学には行かずに働いている。

野球スタイルは、まあたいした事無くて、たまに長打を打つぐらいだ。ポジションはファースト。

たまに自惚れる所がある。

俺とは小学校の時からの知り合いで、カズと一緒に良く遊んでいた。

「何だ？」

「ポジションは？」

「つあ。あ～あ忘れてた。じゃあ、これからポジション説明するんで、聞いといてえー！」

キャッチャーからいくよおー！キャッチャーは山根！ファースト岡島！セカンド防人！サード沖田！ショート 富崎！レフト如月！センター山口！ライト内村！で、キャッチャーの山根が来れない時は富崎が入る。抜けたシヨートはその時のメンバーで決める！次、ピッチャーは安土・山根・沖田・西垣！でいくから。じゃあ、さつさとアップして、8対8で紅白戦しますよー！」

『おおーー』

こうして、俺たちの草野球チームは始動し始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7117a/>

草野球チームを作ろう！！

2010年10月15日09時09分発行